

司会：岩本誠吾氏 本日はお忙しい中、多数の皆様方にご来場頂きまして誠にありがとうございます。只今より、京都産業大学・世界問題研究所・主催「アメリカニズムとヨーロッパ・西洋文明の岐路と東アジアの将来」と題します京都産業大学創設40周年記念シンポジウムを開催させていただきます。尚、本シンポジウムは京都府、京都市、京都商工会議所、サントリー文化財団、読売新聞大阪本社、イタリア文化会館、在大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館のご後援を頂いております。本日のシンポジウムの司会・進行を務めさせていただきます私、世界問題研究所・所員の岩本誠吾でございます。最後までどうぞよろしくお願ひ申し上げます。(拍手)

それでは開催に当たりまして、主催者からご挨拶申し上げます。

まず、京都産業大学・世界問題研究所・ロマノ・ヴルピッタ所長お願ひ致します。

所 長 挨 拶

ロマノ・ヴルピッタ所長 皆様、こんにちは。

ご紹介を頂きました、京都産業大学の世界問題研究所所長、ロマノ・ヴルピッタと申します。皆様、本日は、遠いところからお越し下さりまして有難う御座いました。

ご多忙の中、貴重な時間を割いていただき、遠いヨーロッパからこのシンポジウムのため京都まで来て下さったブルンクホスト先生とフィニ先生に心からお礼を申し上げます。また、今回のシンポジウムを後援して下さった京都府、京都市、京都商工会議所、サントリー文化財団、読売新聞大阪本社、イタリア文化会館、在大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館に心からお礼を申し上げます。

これより、ドイツのフレンスブルグ大学教授ハウケ・ブルンクホルスト先生と、イタリアの有力紙「クオティディアーノ・ナツィオナレ」の論説委員マッシモ・フィニ先生というお二方の著名なオピニオン・リーダーを招き、ヨーロッパから見たアメリカニズムについてお話を聞かせていただきます。

我々の研究所は、3年間の企画をもって、この課題について研究を進めております。アメリカとヨーロッパ、アメリカニズムとヨーロッパというテーマは、現在脚光を浴びていますが、今に始まったテーマではありません。実際、アメリカ合衆国が独立してから、すなわち18世紀の後半から、アメリカ合衆国は、新大陸の国として、旧大陸のヨーロッパに対する新しい現実として意識されました。この「新大陸の国」、「新しい世界」の観念は、アメリカの自己意識であり、新生の国に対するヨーロッパの意識でもありました。しかし、アメリカという新現実を意識することによって、ヨーロッパは同時に旧大陸として自己を意識するようになりました。なぜならば、その時点まで、西洋とはヨーロッパと同義であり、アメリカがヨーロッパの延長として理解されたからでありま

す。しかし、アメリカが独立することによって、ヨーロッパ人は西洋のなかにヨーロッパではないものも存在することを意識し、そこからヨーロッパの自己意識は誕生し、その時点から「西洋」と言う観念には、ヨーロッパとアメリカという二つの現実が包含されるようになりました。そして、この二つの現実、新旧として観念的に対立の関係をなしていました。しかし、この対立の意識は、最初の段階、「新」と自称したアメリカに明らかであったのに、ヨーロッパには潜在的な状態のままに残り、明らかになったのは、20世紀の初頭でありました。というのは、アメリカが経済・政治・軍事大国としてヨーロッパの競争相手になったときであります。したがって、アメリカがヨーロッパに対して「脅威」となったときからであります。アメリカニズムに対する抵抗は、アメリカが経済、政治、軍事面、そしていよいよ文化面にも優勢となったことに対する危機感から生じたものです。したがって、アメリカの政策だけではなく、アメリカの文明と生活の様式に対しても抵抗となりました。

20世紀の終わり頃、戦後体制の終焉の結果、世界でアメリカ一極体制が確立したことで、アメリカに対するヨーロッパの姿勢がさらに微妙になりました。アメリカが提唱するグローバル化が、一部のヨーロッパ人から従来の社会体制に対する脅威と見なされているなかで、統合されたヨーロッパがアメリカに対抗できる新しい極として期待されるようになりました。

京都産業大学の世界問題研究所が招待したお二方は、あらゆる観点から対照的な位置に立っております。ドイツとイタリアという、国民性の対照であり、学者と評論家という対照であります。より根本的な対照に触れると、ブルクホルスト先生は、理性的な立場から進歩的な世界観の持ち主でいらっしゃるのに、フィニ先生はより情熱的な観点から進歩と近代そのものを批判・否定するのであります。

ブルクホルスト教授はフランクフルト学派の第三世代の中心的な存在で、ヨーロッパの啓蒙主義の理念を継承し、市民による世界秩序の樹立を提唱し、アメリカの覇権主義を批判しております。

一方、フィニ先生は、1990年代初頭、イタリアの政治体制の腐敗を告発して辣腕を振りましたが、今日は同じ情熱を込めて、政治的観点からアメリカニズムを分析することでしょう。

お二方の講演者はヨーロッパの視点からアメリカニズムについてお話をなさりますが、彼らの話は、日本、いや、アジアにとって無関係の話ではありません。なぜならば、日本とアジアも同じ問題に直面しているからです。したがって、ご来場の皆様は、ヨーロッパについてのお話を聞きながら、日本とアジアのことについて考えるためにより機会になることを願って、挨拶の言葉を終わらせていただきます。

どうも、有難う御座いました。(拍手)

司会：岩本氏 ロマノ・ヴルピッタ所長からのご挨拶でした。

続きまして、京都産業大学を代表いたしまして、学長よりご挨拶申し上げます。坂井東洋男学長

願います。(拍手)

学 長 挨 拶

坂井東洋男学長 ご紹介に預かりました学長の坂井東洋男でございます。

本日は週末の何かと御用のある日に、京都産業大学世界問題研究所主催の国際シンポジウム・公開講演会によるご来場賜りました。厚く御礼申し上げます。京都産業大学は昨年の四月に開学40周年を迎えまして、昨年の秋以来、各地で様々な記念行事を展開して参りましたが、本日と明日のシンポジウムが有終の美を飾る行事という事になります。京都産業大学は建学の精神に、“高い志をもって海外に雄飛し活躍できる人材、次の時代の日本社会を担える人材の育成”を掲げております。大学は何よりも研究、そして教育にいそしみ、そして京都産業大学の名称に“産業”とございます様に、研究成果を社会に還元する、社会貢献する事、これを京都産業大学は建学の精神に掲げて参りました。世界問題研究所はその建学の精神の重要な柱である研究を担う、研究の牽引車として開学の翌年の1966年に、設置されました。歴代の所長を務められた方、たくさんいらっしゃいますけれども、中でも、若泉敬所長はその著作『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』で知られております。お読み頂いた方もいらっしゃるかと思いますが、沖縄返還交渉の経緯と言いますか、交渉に関わる秘話でございまして、アメリカのニクソン大統領そしてキッシンジャー、日本では佐藤栄作首相そして若泉先生この四者のみぞ知る交渉の経緯を綴った物でございまして……。すなわち、若泉先生は学内での、世界問題研究所での研究活動でのリーダーであると共に、実践活動として沖縄返還のために全身全霊を傾注された、真に高潔な志を持った憂国の士でございました。若泉先生ばかりではございません。歴代の所長は、いずれも専門分野こそ異にしつつも、いずれ劣らぬ世界認識と高邁な見識をお持ちで、それは現所長のロマノ・ヴルビッタ所長に至りますまで脈々と受け継がれて参りました。

本日と明日の国際シンポジウム、本日は公開講演会とさせて頂いておりますけれども、ご講演をドイツのフレンスブルグ大学教授のハウケ・ブルンクホルスト氏に、またイタリアのジャーナリストでありますマッシモ・フィニ氏にお願いできました事、まことに遠い所、またお忙しい中、お引き受け頂き心から感謝申し上げます。今、所長からのご紹介にありました様にお二人とも大変高名な、この分野では世界的な第一級の専門家として知られております。

顧みますと、今日でこそ、こうして世界的な碩学をお招きして講演会を開催するというのもさほど珍しい事ではなくなりました。本学でも近年では数年前に日本文化・日本文学の研究者である、ドナルド・キーン博士をお招きし、また、ノーベル物理学賞のレグット博士、また、ノーベル経済学賞のスミス博士をお招き致しまして、大変大きな反響を賜りました。この様な講演会を開催する

事が本学の社会的な使命という風に考えておりますけれども、古くは40年前に世界問題研究所が設置された1966年に、その秋にアメリカから、中国文学者であります林語堂博士をお招きいたしましたのを皮切りに、イギリスの歴史学者のアーノルド・トインビー博士、また、アメリカの未来学者であるハーマン・カーン博士、フランスの哲学者のレイモン・アロン博士など、ここで列举するいとまがないくらいに大勢の方々に講演にお越し頂きました。手前味噌になりますけれども、その当時の日本の社会状況におきましては類例のない、稀有な事ではございました。これはひとえに学生諸君に高い志を持って海外で活躍できる人材たらしめるためには、第一級の碩学に直接接する事が不可欠であるとの創設者・荒木俊馬博士の信念から発するものでございました。今回の国際シンポジウム、明日は場所を京都駅の近くの“ぼるるプラザ”に移しまして、これは申し訳ございませんが、非公開の地道な研究活動という事になりますけれども、ヨーロッパ・アジア・そしてまた国内からも大変有名な第一級の専門家の方々に越しいただきまして、パネル・ディスカッションを開催する事になっております。先ほどの所長のお話にもございましたけれども、現在のこの世界問題研究所の研究プロジェクト、3年計画の2年目でございます、まだ中間点でございますが、このプロジェクトには本学の若手の俊秀の研究者が大勢かかわっております。今回のシンポジウムは、この十余名の研究所員が研究プロジェクトを推進する中で、その一環として企画されたものです。シンポジウムの企画と運営に当たってくれた所員の尽力に謝意を表するとともに、今回のこのシンポジウムを通じて今後の研究活動の展開に大きく、有益な刺激が生まれることを期待しております。最後になりますけれども、改めましてイタリアそしてドイツから講演にお越し頂きましたハウケ・ブルンクホルスト教授、またマッシモ・フィニさんに心から御礼申し上げます。最後までご清聴賜ります事をお願い致しまして、開催にあたりましてのご挨拶に代えさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。(拍手)

M.C.: Prof. Iwamoto Seigo Thank you all for taking time out of your busy schedules to be with us today. The title of this symposium is “Americanism and Europe: Western Civilization at the Crossroads and the Future of East Asia”. It is held by the World Affairs at Kyoto Sangyo University which commemorated its 40th founding anniversary last year. It is my pleasure to formally open this two-day symposium. This event would not have been possible without the cooperation of the Government of Kyoto Prefecture, the Kyoto City Government, the Kyoto Chamber of Commerce, the Suntory Cultural Center, the Osaka Main Office of the Yomiuri Newspaper, the Italian Cultural Center and the Osaka-Kobe Consular Affairs Office of the Republic of Germany. My name is Iwamoto Seigo, and I am the Master of Ceremonies for today’s session. I work for the Institute for World Affairs at this university. It is a great honor to welcome all of you to this symposium. (Applause)

At this point, I would like to call on the sponsors of this event to give us their introductory greetings. First, Professor Romano Vulpitta, the director of the Institute for World Affairs at Sangyo University will give us his opening remarks.

Welcoming Speech of the Director

Director: Romano Vulpitta Good afternoon everyone. Thank you for your kind introduction. I am Romano Vulpitta, the director of the Institute for World Affairs at this university. I would like to thank you all for coming from far away places all over the country. I would also like to thank our two distinguished speakers who came all the way to Kyoto to be our keynote lecturers during this two-day symposium. In addition, I would like to express my appreciation to the sponsors of this symposium: the Prefecture of Kyoto, the City of Kyoto, the Kyoto Chamber of Commerce and Industry, the Suntory Cultural Foundation, the Yomiuri Newspaper (Osaka Head Office), the Italian Cultural Institute and the Osaka-Kobe Cultural Consulate-General of the Federal Republic of Germany.

Today, Professor Hauke Brunkhorst from Flensburg University in Germany and Massimo Fini, a member of the editorial board of the influential newspaper “Quotidiano Nazionale” in Italy, are our two invited speakers from Europe who will shed light on the topic: “Americanism from a European Perspective”. They are both very well known opinion leaders in Europe on the topic at hand.

The topic of this symposium is a part of an ongoing three-year research project at the Institute for World Affairs at this university. It is worthwhile to note that this topic about America and Europe, or Americanism and Europe, is not only relevant in today’s world. In fact, since the end of the 18th century, when America gained its independence from Britain, Europe was keenly aware of the existence of America as a new country, highlighting the fact that Europe was old and America was new. America itself was destined to establish an identity of its own as a country that was distinct from Europe. On the other hand, Europe viewed America as a newborn country. In other words, with the newly emerged country, America, European nations developed an awareness of themselves as the Old World. Up until this time, the West was understood to be Europe and America its extension. However, after America gained its independence, the Europeans considered it part of the West but apart from Europe. This perception of America has led Europe to develop a concept of itself in contrast to the new world. From then on,

the West was to be construed as a two-pronged reality, that is, America and Europe. There ensued a confrontation between the two realities of the new and the old worlds. While America was aware of the conflict between the ideas of the new and the old worlds from the very beginning, in Europe it remained latent and did not become evident until the end of the 19th Century. This was inevitable given that America as an economic, political and military superpower had become Europe's competitor during this time. In Europe, America came to be viewed as a threat. This sense of crisis has resulted in resistance to Americanism, against American economic, political, military, and finally, cultural superiority. Anti-Americanism is reflected not only in resistance to American foreign policy but also in resistance to American civilization and the American way of life.

Towards the end of the 20th century, as a result of the end of the post-war system, America established a unipolar world order. Understandably, Europe was alarmed by this development. A part of Europe perceived America's advocacy of globalization as a threat to their old social system. With the integration of Europe, it was expected that Europe would be another power center, able to counter-balance America's dominance in the world.

Our two invited speakers come from contrasting standpoints. To begin with, they are from different backgrounds; one is from Germany and the other is from Italy. Therefore, they possess different national temperaments. In addition, one is a scholar and the other is a newspaper critic. A basic contrast is in the presentation of their views; Professor Brunkhorst will give us a scholarly view embracing a progressive perception of the world while Mr. Fini will present his views with passion, criticizing progress and modernity and denying their salutary effect on the world. Professor Brunkhorst is a central figure in the third generation of scholars in the Frankfurt School. In the tradition of European enlightenment, he has propounded the idea of building a world order initiated by citizens of the world, thus criticizing American hegemony.

On the other hand, Mr. Fini will analyze Americanism from a political standpoint with the same passion that he demonstrated in the early 1990s when he shrewdly shook the Italian political system by exposing corruption in politics.

Although the two speakers will talk about Americanism from a European perspective, it is not without relevance to Japan and Asia in general. It is clear that Japan and the rest of Asia face the same problems in regards to Americanism. It is my wish that as you listen to the lectures of our invited speakers, you will reflect upon the situation of Japan and the rest of Asia regarding this problem. With this thought, I would like to end my opening remarks. Thank you very much. (Applause)

M.C: Prof. Iwamoto That was Director Romano Vulpitta. To continue, let us call on the representative of Kyoto Sangyo University, the president of the university himself, President Sakai Toyoh, to deliver his greetings. (applause)

Address by the University President

University President Sakai Toyoh As previously mentioned, my name is Sakai Toyoh, and I am here in my capacity as the incumbent president of Kyoto Sangyo University.

I would like to welcome everyone to this opening lecture of the symposium organized by the Institute for World Affairs of our university. I appreciate that you have taken the time from your hectic schedule this weekend to be a part of this event. I extend my warm greetings to all. In April last year, Kyoto Sangyo University started celebrating its 40th founding anniversary. Ever since the fall of last year, various commemorative events were held in many places, and today's activity and tomorrow's symposium will be the perfect culmination of these commemorative activities. The founding spirit of Kyoto Sangyo University is "with a strong determination, we will produce graduates who are confident, can excel in international society and will contribute positively to the next generation of Japanese". The aim of the university is to promote research and education and true to its name "Kyoto Industrial University", the "industry" part of the university name signifies the university's goal to give back to society in terms of the sharing the achievements of its research activities, thereby contributing to the development of society as a whole. This is the spirit upon which this university was founded in 1965. The Institute for World Affairs was established the following year. With the establishment of the center as a prime mover of research in 1966, it became an important pillar in the foundation of the university spirit. There have been many remarkable directors who have headed the center and one of them was Wakaizumi Kei. He is well known for his work (Tasaku Nakarishiwo Shinzemu to Hossu or "I Want to Believe there was no other Option"). I think there are some among you here who have read this book, a detailed account of the negotiations to revert Okinawa back to Japan. In this book, there are anecdotes from the negotiations between President Richard Nixon and Secretary of State Henry Kissinger on the American side and Prime Minister Eisaku Sato and Professor Wakaizumi on the Japanese side. That is to say, while he headed the research activities in the center, he also engaged in practical activities, pouring all his expertise into the negotiation for the reversion of Okinawa back to Japan. Professor Wakaizumi had patriotic fervor and with determination worked hard to realize the return of Okinawa to Japan from the Americans occupation. He was not alone in demonstrating such exceptional professional competence. The successive scholars who filled the directorship of the institute might have differed in research interests, but they all share the quality of a strong awareness of world issues and a noble sense of mission. Professor Romano Vulpitta has kept this tradition alive.

I would like to express my deep gratitude to our invited guests, Professor Hauke Brunkhorst from Flensburg University and Mr. Massimo Fini, an editor of an Italian newspaper. To come all the way to Japan and be away from their respective hectic professional lives is a great favor to us all. They will be giving lectures today and in tomorrow's international symposium. As Professor Vulpitta already mentioned, they are both prominent opinion leaders in Europe, and are well-known specialists in the field to which the topic of this symposium is related.

An affair like this in which highly esteemed specialists in the world are invited to give lectures in our university is not a rare occurrence. In recent years, we invited Donald Keene, who is a scholar in Japanese Culture and Japanese Literature. We have also invited two Nobel Prize laureates, Sir Anthony James Leggett, a Nobel Prize laureate in Physics, and Dr. Smith, a Nobel Prize laureate in Economics, and we received an overwhelming response to these lecture invitations. In organizing open lectures like this, we are fulfilling the mission of our university. Forty years ago, in the fall of 1966, we invited a scholar of Chinese Literature from America, Dr. Lin

Yutang (林語堂), to be our first lecturer. Subsequently, we invited an English historian, Dr. Arnold Toynbee, Dr. Herman Kahn, an American futurologist, and Dr. Raymond Aron, a French Philosopher; these are just a few of the many internationally renowned figures who have come to deliver their lectures in varied fields of scholarship. Considering the social conditions of Japan at that time, organizing events like these was unprecedented and quite significant. The idea of tapping the well of first-rate world scholarship and making it accessible to the students of Kyoto Sangyo University came from the founder himself, Dr. Araki Toshima. It was his belief that in order to educate the students and turn them into useful members of the international community, they must have exposure to first-rate scholarship in the world. Tomorrow's international symposium will be held at Paruru Plaza at Kyoto Station. We are sorry that it will not be open to the general public; instead, famous scholars from Japan, Europe and other parts of Asia will attend. There will be a panel discussion during which these specialists in the field will exchange their ideas with our keynote speakers. As previously mentioned by Professor Vulpitta, we are now in the second year of a three-year research project undertaken by the Institute for World Affairs. In this project, many of our young talented researchers are actively involved. Ten members of the research staff at the institute have put this symposium into place to promote the ongoing research project. The desired outcome of this symposium is to stimulate further research activities in the future. It will be the ultimate reward for the tireless efforts of the organizers of this symposium at the Institute for World Affairs if their wish will come true. Finally, let me express again my heartfelt gratitude towards the two keynote lecturers, Professor Hauke Brunkhorst, from Germany, and Mr. Massimo Fini, from Italy. Thank you all for listening to my opening speech through to the end. Thank you very much. (Applause)